

シューキン演劇大学劇団の公演 『イワーノフ』

二〇一五年六月三日、東京外国語大学プロメテウスホールにおいて、シューキン記念演劇大学の劇団による『イワーノフ』の公演がおこなわれた。「ロシア文化フェスティバル日本組織委員会」が招聘・主催し、本学総合文化研究所が共催。二限から昼休みにかけての時間を充て、ロシア語専攻の学生たちには授業の一環として観劇してもらった。

シューキン演劇大学は一九一四年にエヴゲーニイ・ワフタンゴフがモスクワで学生たちに演劇指導をしたのが始まりで、昨年、創立百周年を迎えた。名優ボリス・シューキンの名を冠するようになったのは一九三九年。長年にわたって演劇・映画・テレビの世界に数多くの才能を輩出してきた由緒ある学校である。一九六七年制作のソ連映画『アンナ・カレーニナ』で主演を演じたタチヤナ・サモイロワもこの大学の出身だ。

今回チエーホフの戯曲『イワーノフ』を演じたのは、ニーナ・ドヴォルジェツカヤ先生のクラスで学んだ「俳優の卵」たちで、みな昨年六月に卒業したばかり。ミハイル・セマコフ教授による演出、指導のもとで二年ほど前から練習を重ねてきたという。

『イワーノフ』はチエーホフの初期戯曲だ。最初は一八八七年にモスクワのコルシユ座で上演されたが、その後、今の形に



報告 沼野恭子

改作され、翌一八八八年にペテルブルグのアレクサンドリンスキー劇場で「初演」された。理想を夢見て挫折した主人公イワーノフ（ドミトリー・ニコノフ）。今では病に冒された妻アンナ（アントニーナ・パペルナヤ）への愛も冷めてしまっている。そこへ若い娘サーシャ（ナターリヤ・イグリナ）が現れ、イワーノフはもう一度自己の「再生」を賭けようとする…。

ちぐはぐな人間関係、勝手な思い込み、空回りする愛、絶望と倦怠。舞台上では、二〇代の若者たちが演じているとは思えないほど深いドラマが繰り広げられ、チエーホフの世界が遠い未来（すなわち現代）にまで投げかけたまなざしを充分に感じることができた。

本学ロシア語専攻の学生の多くは毎年、外語祭でロシア語劇を上演しているし、他にもインターカレッジのロシア語演劇サークル「コンツェルト」に参加している学生もいる。また芝居熱が高じてロシアに演劇留学する学生もいるほどなので、今回の公演は学生たちにもたいへん刺激的だったようだ。

なお、プロメテウスホールの設営から字幕の準備、リノリウム貼り、撤収まですべて、外語祭実行委員会の語劇局に所属する学生たちが全面的に協力してくれたことを付記しておきたい。